

関連項目：指導体制プラン③

学年団を中心としたサポート体制の確立

目的

本校は、島しょ部の中においては規模が大きく、教員数は20名です。教員は、若年・中堅・ベテランの人数が、学校全体においても学年団においてもバランスよく配置されています。このような学年団を中心としたサポート体制を強化することによって、チームの力を生かして、校内の情報の伝達を始め行事や児童についての共通理解を深めたり、より早い適切な対応に取り組んだりしています。

内容

● 教育活動の具体化を図る学年団会

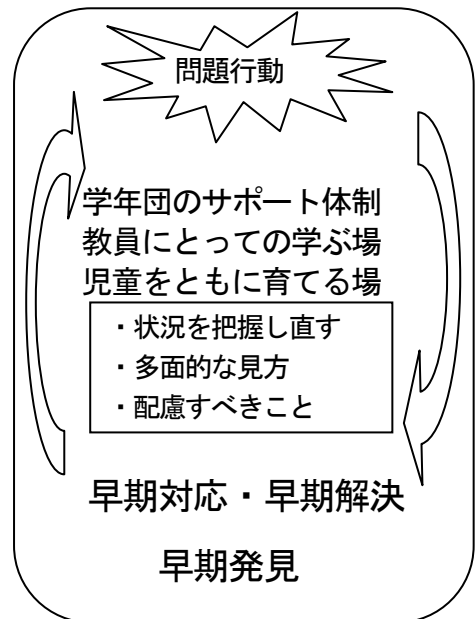
- ・企画会議で提案された諸活動についての周知・検討
活動の概要を理解し、学年団または学年で話し合っておくべきことについて周知・検討する。
〔 学年団ごとに情報を流すことで、スピーディで確実な共通理解を目指す。
計画的な活動の取り組みに生かす。
学年団ごとに分担できることを話し合う。〕

● 児童の問題行動発生時の学年団会

- ・児童の問題行動の情報の共有化
必ずその日の内に学年団会をもち、話し合う。
〔 児童にどんな問題が起きているか。
担任はどう対応し、どのように解決に向かっているか。
児童への事実確認の仕方や指導すべき点は何か。〕

● 支援を要する児童への対応について話し合う学年団会

- ・教員ひとり一人が実践している支援の工夫の共有化
話し合う場を確保する。
〔 児童の現状の見取りとその対応方法について報告し、意見を交換する。
安心して学習できる環境づくりについて意見交換する。
児童を落ち着かせる声かけについて具体的に話し合う。〕
- ・2学期からは、それぞれの児童にかかわっている他の学年団の教員との情報交換や共通理解の場も、積極的にもつようにした。



成果

こうした取り組みをすることで、学年やクラスの枠にとらわれず、教員が児童に声をかけたり、児童も教員に話しかけたりすることが多くなりました。学年団の教員全員で児童を育てるという体制が確立し、児童の言動も落ち着いてきているように感じます。教員は、学年団会を通して活動の進め方や問題解決の仕方などを学び合い、指導に生かすことができるようになってきました。また、学年団会をもたないときも、児童の様子をお互いに聞き合い、声を掛け合ったり、よい行いの情報交換をしたりして、子どもたちとの人間関係作りに役立てることができるようになってきています。そして、学校評価アンケートでは、学校に来ることが「楽しい」「ほぼ楽しい」と感じている児童の割合が、1学期末から2学期末にかけて80.2%から82.2%と多くなっています。